

カストリア、アギイ・アナルギリ聖堂のコスマスとダミアノス

—— 聖人像表現と伝記サイクルについて ——

海老原 梨 江

アギイ・アナルギリ聖堂

湖に周囲をかこまれた半島の町カストリアは、ギリシア北西部に位置する風光明媚な小都市である⁽¹⁾。この町の北東に小さな三廊式バシリカ、アギイ・アナルギリΑγιοι Ανάργυροι聖堂が建っている(図1)。⁽²⁾「アナルギロスΑνάργυρος」は「一文無し」を意味し、報酬を得ずに奇跡の力で病を癒す聖人を指す。この種の聖人は幾人か存在するが、複数形で「アギイ・アナルギリ」とすればコスマスとダミアノスという双子の兄弟を示すのが通例で、本聖堂も彼らに捧げられたものである。

聖堂の建築は10世紀後半から11世紀前半に位置づけられる⁽³⁾。外壁には煉瓦の組合せによりキリストのモノグラムや車輪形・ジグザグ文などの装飾が、入口周囲の外壁と聖堂内部にはフレスコによる壁画が施された。様式の分析から、壁画の制作年代は一部に残る初期のものが10-11世紀に、それ以外が12世紀後半に帰される⁽⁴⁾。本稿では後者の部分、特に献堂聖人コスマスとダミアノス像と聖人伝サイクルに焦点を絞りたい。筆者は現在、ギリシアに現存する85聖堂を対象として、中期ビザンティン聖堂装飾プログラムにおける聖人像の役割と意義について研究を進めているが、本稿はその対象を一聖堂・二聖人に限定し、現時点までの成果の一部を報告するものである。

堂内に残る銘文と北側廊の寄進者像から、対象となる壁画は、地方貴族テオドロス・リムニオティスなる人物とその妻で首都の高級官僚の家系に連なるアンナ・ラディニの寄進によるものとわかる⁽⁵⁾。彼らは劣化した建築を修復し、フレスコで壁面を再び装飾、治癒の奇跡を起こす兄弟の聖人に捧げた⁽⁶⁾。

様式の違いから少なくとも2つの画家グループの存在が推測され、便宜上AとBの呼称が与えられる⁽⁷⁾。聖堂上部を手掛けたのがB、それ以外の部分がAである。おそらくBによって開始された壁画制作は何かの理由で中断さ



図1 アギイ・アナルギリ聖堂外観



図2 聖堂内部東側

れ、残りの大部分の壁面がAに継承された。⁽⁸⁾

ハデルマン＝ミスギッシュ Hadermann - Misguichはさらに第三の画家の存在を指摘し、ナルテクスの壁画を画家Cの手とする⁽⁹⁾。Aはその個性的な様式が酷似するため、マケドニア共和国クルビノヴォにあるスヴェティ・ジョルジュ聖堂の画家と同一視される⁽¹⁰⁾。アギイ・アナルギリ聖堂下部の聖人像はこの画家の仕事で、本稿では画家の手の見分けにはこれ以上踏み込まず、Aの壁面のみを扱う。

小規模な聖堂ながら、室内には計66名の聖

人が描かれた。中期ビザンティン聖堂の一般的な位階に従い、東側に主教、身廊入口周辺に兵士、ナルテクスに女性の聖人が並ぶ⁽¹¹⁾。修道士は南側廊に集中し、献堂聖人であるコスマスとダミアノスは以下の通り数箇所に配された。①聖堂外壁西側、入口両脇の立像。②ナオス東壁面、体をアプシスに向け両手を上げる全身像（図2）。③南側廊への通路東壁面、キリストより冠を授かるイコン的肖像（図2右側）。④南側廊上部のアナルギリ伝サイクル。

聖堂に入る者は、まず入口外壁に立つ両聖人の間を通過することとなる。兄弟はアプシスの両側と南側廊の入口東側という、ビザンティン聖堂において神学的位階の高い東壁面に配置され、同時に身廊に入る者の目に速やかにその姿が映じるよう配慮されている。

北側廊は聖戦士ゲオルギオスに奉じられ、彼の聖人伝サイクルや馬に騎乗する姿が描かれた。南壁に献堂図が表され、豪華な衣装を纏う寄進者一家が聖母子像の両側に立っている。対する南側廊では寄進者テオドロスは一人、テオフィロスと名を変え、慎ましい修道士の姿で聖堂を手を持つ⁽¹²⁾。世俗にあって軍事の職に従事した寄進者は、おそらくゲオルギオスを自らの守護聖人となし、その記念として北側廊を捧げた。南側廊に描かれたのは、平癒と死後の安寧を願ってアナルギリの兄弟に本聖堂を献じた寄進者の遁世の姿であり、南北の側廊において在俗と遁俗が対置されている⁽¹³⁾。

アギイ・アナルギリは早くから人々の崇敬を集め、5世紀以降、首都コンスタンティノポリスを始め各地に聖堂が献堂された⁽¹⁴⁾。彼らへの人気は聖人伝の複数のヴァリエーションを生み、首都の聖者暦「コンスタンティノポリスのシナクサリオン（10世紀）」では、アラビア・ローマ・アジア、異なる出身地と祭日を持つ三組のアギイ・アナルギリが採録されている⁽¹⁵⁾。三組には基本的に図像上明確な違いがないが、アジアのアナルギリの場合、母親のテオドティが共に並ぶことがある⁽¹⁶⁾。南側廊のアナルギリ伝サイクルにテオドティと見られる女性が登場し、また彼ら固有のエピソード場面が表されていることから、本聖堂はアジアの兄弟に献堂されたものと特定してよい⁽¹⁷⁾。

だろう。

アギイ・アナルギリ像

異なる出身地を持つ同名の聖人たちに表現上の違いが見られないと述べたが、この点について暫し、他の作例を参照しつつ論じていきたい。アナルギリ像に附される銘文に出身地が記されることはなく、同定を促す図像上の手掛りも与えられない。この事実、ビザンティンの人々にとって異なるアナルギリの兄弟を区別する必要が無かったか、あるいは区別が自明であったかのいずれかを示すだろう。双子であるコスマスとダミアノスはほぼ同一の相貌を擁し、本聖堂に見られる如く短髪に薄い口ひげと顎ひげを蓄えた姿をとることが多い⁽¹⁸⁾。しかし諸作例の観察から、例え同一組であっても、ある時は相似し、ある時は異同があることが知れる。アナルギリ像の検討はビザンティンにおける聖人像表現やアイデンティティの視覚化に対する問題を喚起することになる。

アギイ・アナルギリ表現の源泉と識別の問題については、クシングプロス Andreas Xyngopoulos が、ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂所蔵の大理石板（12世紀後半）を取り上げ、考察を行った⁽¹⁹⁾。この大理石板は二組のアナルギリをともに描く点において、また二組ともが無髯の若者として表される点において、稀有な作例である。石板の矩形枠は上下二つに区分され、上部に十字架を手に持つ女性、その両側に無髯の若者らの胸像が並ぶ。下部にやはり無髯の若者二名が、三本の門柱とそれらを渡す二つのアーチで囲まれた枠内にそれぞれ立つ。上部の胸像二名は女性を伴うので、アジアのアナルギリと同定できる。従って下部の二体の立像はアラビアあるいはローマ出身の組のいずれかとなるが、クシングプロスは後者と結論した⁽²⁰⁾。

彼によれば、元々無髯のアナルギリは初期キリスト教期のローマの殉教者をモデルとした表現であり、ひげのある成年の姿は同時期のアラビアの風習に基づく。つまりアナルギリ像にはローマ型とアラビア型の二系統とが在在した。三組のうち最も早く崇敬を受けていたのがアラビアの兄弟であり、例えばテサロニキのロトンダやローマのサンティ・コスマ・エ・ダミアノ聖堂に描かれた。中期以降はアラビア型が主流となるが、ローマ型の表現を継承する聖堂も



図3 サン・マルコ大聖堂大理石板（12世紀後半）

少ないながら残されている。⁽²¹⁾

有髯のアナルギリをアラビア型、無髯をローマ型とするクシゴプロスの分類を考慮に入れながら、次に初期から中期の作例を中心に観察していこう。諸作例はアギイ・アナルギリ像のヴァリエーションが先の分類の二項目以上に豊かであることを物語る。

規範となる聖堂装飾プログラムが確立される中期（9-13世紀初め）以降、アナルギリは神学的位階に従って聖堂西側に配されることが多いが、⁽²²⁾初期（4-8世紀）には聖堂東側やドームにも描かれた。最初期の例としてテサロニキのアギオス・ゲオルギオス聖堂（ロトンダ）のドーム・モザイク（5世紀半ば）が挙げられる。⁽²³⁾兄弟は両者ともやや長めのひげを蓄える成年の姿で表され、クシゴプロスによればアラビアのアナルギリとなるが、ひげの形や髪の色等が異なる点に留意しておきたい。

クロアチア、ポレチのバシリカ・エウフラシアーナ（6世紀）の北アプシス・コンクでは、キリストから戴冠される二聖人のうちダミアノのみ無髯の若者である（図4）。⁽²⁴⁾クシゴプロスの分類には適応しない例で、両者は同じ特徴を有さない。一方ほぼ同時期のエジプトの修道院パウイトの第28番葬礼用礼拝堂東壁面、アプシスに向かって右側に瓜二つの二聖人の立像が並び、ともに丸い顎ひげを蓄える成年として表される。⁽²⁵⁾同じくエジプトのワディ＝サルガWadi Sarga（6-7世紀）の壁画では、「燃える炉の3人の若者」の両側にコスマスとダミアノス、下部に彼らの三人の兄弟が描かれた。⁽²⁶⁾従ってこのアナルギリはアラビアの聖人となるが、⁽²⁷⁾前者が豊かなやや長めの顎ひげを持つのに対し、後者は卷毛のひげを有しており、異なる特徴を以て表される。

アギイ・アナルギリに献堂された初期の聖堂として、ローマのサンティ・コスマ・エ・ダミアノ聖堂（527年）がある（図5）。⁽²⁸⁾アプシスのコンク・モザイク（6世紀）には、使徒ペテロとパウロに導かれたアナルギリが、冠を手に掲げ中央のキリストに歩み寄る。両者の相貌は違えられ、

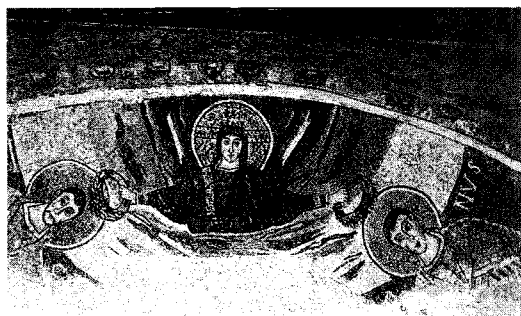


図4 バシリカ・エウフラシアーナ（6世紀）
北アプシス
左：コスマス、右：ダミアノス



図5 サンティ・コスマ・エ・ダミアノ聖堂ア
プシス・モザイク（6世紀）（部分）
左：ダミアノス、右：コスマス

コスマスが薄く丸い顎ひげを持ち、やや後退した額の中央に丸い髪の毛の束が描かれているのに対し、ダミアノスは後世の如く面長の顔に巻毛、頬・口・顎に薄いひげを蓄える⁽²⁹⁾。

初期においてアナルギリの像は一様ではなく、それぞれの表現に相違が観察される。この時期は、アナルギリ信仰の拡大に伴って聖人伝のヴァリエーションが生み出された過渡期であり、固定化したフィジオノミーを獲得する以前の揺籃期に当たる。そのため作例ごとに表現上の揺らぎが生じたとの説明ができるだろう。しかし中期以降もこの兄弟の表現には、依然として幾つかの図像タイプが並存する。10世紀に聖人伝の編纂事業が行われ、アナルギリが三組の同名の聖人として整理された後も異なる組で描分けは行われず、また双子であるにも拘らず兄弟同士で異なる相貌で表されることもある。アナルギリの表現上の振幅は一体何を意味するのだろうか。次に聖人像の性質について確認しておこう。

マグワイア Henry Maguire は聖人伝テキストや絵画作例を通して、ビザンティンの聖人像を論じた⁽³⁰⁾。テキストが伝えるように聖人像は現実を象るものとしてあり、実際の姿を即座に喚起するものであった。像とは定義であり、真実らしさとは定義の正確さにある。聖人の定義は第一に使徒や主教、殉教者といったカテゴリーによるもので、衣装や持物が指標となる。次に髪型や色、ひげの有無で区別が促される。イコノクラスム以降はさらに像の脇に明記される名前が確実な同定へと導いた。多くの人気を集めた聖人は頻繁に描かれるため確たる容貌の型を獲得し、その型は広範囲・長期間に亘り踏襲されることとなる。

曖昧さや誤解を退ける正確な定義であることが、聖人像に要求されるものであった。一旦その像を見れば、直ちに聖人本人の姿であることが了解された。しかしアナルギリ像には複数の図像タイプが存在する。三組の同名の兄弟が生まれる程に大衆性を得、数多くの作例にその姿が描かれたにも拘らず、彼らはなぜ固有の容貌を獲得しなかったのか。異なる組のアナルギリは、なぜ表現上明確な違いを持たないのか。

この問題についての見解をまとめる前に、中期の作例を見ておきたい。アジアのアナルギリが、母テオドティ、パンテレイモンと共に描かれるシナイ山のイコン（1100年頃）では、コスマスが面長の顔に巻毛、頬・口・顎に薄いひげを持ち、ダミアノスが薄く丸い顎ひげを蓄える⁽³¹⁾（図6）。同時期の別のイコンでは二聖人の立像は全く同じ姿をとる⁽³²⁾（図7）。

2枚のイコンはそれぞれ異なる組の兄弟を描いた可能性があるので、続いて写本の作例



図6 シナイ山イコン（1100年頃）
左からコスマス、テオドティ、ダミアノス、
パンテレイモン



図7 シナイ山アイコン（1100年頃）

を挙げよう。シメオン・メタフラスティスによるメノロギオン（10世紀）は、11-12世紀に数多くの写本を生産する契機となった。⁽³³⁾約850の写本が現存し、そのうち43写本が挿絵を擁する。アギイ・アナルギリの図像を持つのは①テサロニキ、ヴラタドン修道院cod. 3, fol. 1r、⁽³⁴⁾②シナイ山アギア・エカテリニ修道院gr. 500, fol. 5r、⁽³⁵⁾③同修道院gr. 499, fol. 2r⁽³⁶⁾の3写本で、いずれも11月1日のアジアの兄弟を描く。③の挿絵では、門形のヘッドピースに両聖人の正面像が並ぶが、二人共同じ相貌を持つ無髯の若者である。

シナイ山アイコンでテオドティと並ぶ兄弟の相貌は異なり、またひげを有していたのに対し、③の写本では両者とも無髯の若者として描かれた。⁽³⁷⁾アギイ・アナルギリ聖堂では彼らは薄いひげを生やす成年の姿である。⁽³⁸⁾同じア

ジアのアナルギリといえども、必ずしも同じ図像の型に則るわけではない。

初期から中期にかけての表現において、三組は図像や銘文の上で明確に区別されることはなかった。当の双子以外の家族を伴うことで、どの組であるかが知れる場合はある。兄弟の表現では同一の特徴を有する時と異なる相貌で表される時とがあり、前者の場合は両者が有髯か無髯、後者の場合は兄弟のいずれかが無髯、両者とも有髯であっても形が異なることがある。

曖昧さを許さぬ正確な定義としての聖人像という認識と、諸作例が伝える聖人像のヴァリエーションとの関係をいかに捉えればよいだろうか。やや簡略化するならば、アギイ・アナルギリは複数の領域においてそれぞれ異なる存在の様態を持つと考えられる。すなわち、首都のシナクサリオンに見るように、公式にはアナルギリの兄弟は三組存在した。神学者や一部の修道士など聖人伝に通曉する者は、そのことを認識していただろう。一方でより大衆的なレベルでは、一般信徒の崇拝対象としてのアナルギリは、出身地や詳細な伝記の内容を加味することなく、奇跡で病を癒す双子の聖人というのみで十分であった。表現の領域において中期以降も複数の図像タイプが並存していたのは、初期に生まれた図像の幾つもの型が一つに集約されることがなかったためだろう。頻繁に描かれた人気のある聖人ではあったが、複数のアギイ・アナルギリの存在が唯一のフィジオノミーへの固定化を阻んだ理由であるかもしれない。

型の反復を前提とするビザンティン美術において、同一聖人の表現に振幅が看取される背景に

は、聖人信仰の発展と拡大、長期に亘る崇敬とそれらに伴う聖人伝・図像の型の派生、公と私の領域での聖人受容の相違等が考えられる。図像のヴァリエーションは、個々人の意識を超えた変化の足跡であり、膨大な時の集積と無数の人々の信仰の産物であった。画家は、逸脱したのではない。彼はおそらく兄弟の聖人がどの出身地であるかを意識することなく、手持ちの「アギイ・アナルギリ」の手本に忠実に従った。描かれたアナルギリはいかなる型を踏襲しようとして、画家にとって、そしてそれを見る者にとって、紛れもない聖なる治癒者たちの姿であっただろう。⁽³⁹⁾

アギイ・アナルギリ伝サイクル

次に聖堂南側廊に描かれたサイクルをとりあげ、アナルギリ像表現を別の角度から観察したい。⁽⁴⁰⁾同サイクルはアイコンや写本に数例が確認されるが、壁画では本聖堂以外ミストラの府主教座聖堂（アギオス・ディミトリオス聖堂）ディアコニコン（14世紀）で確認されるのみである。⁽⁴¹⁾カストリアの聖堂は先駆的かつ稀有な現存作例であるといえよう。南礼拝堂の説話場面は北壁に4、東壁に1、計5場面が連なる。⁽⁴²⁾北西隅より簡単に各場面を記述しておく。

①画面向かって左側に坐した人物が、コスマスとダミアノスに「ΔΩΡΕΑ（「贈り物」）」と書かれた紙と箱を渡す場面、兄弟は膝丈の青い衣に赤い上衣を纏う。⁽⁴³⁾

②扉を背景に二聖人が立つ。上部剥落のため頭部は欠損、左の聖人は緑の、右は赤のフェロニオンを身につける。両者とも中央に向かって両手を胸の高さまで上げる。⁽⁴⁴⁾聖者暦写本「バシリオス2世のメノログイオン」（10世紀終わり）、アトス山パンテレイモン修道院cod. 2, fol. 197v（11/12世紀）、同山ディオニシウ修道院cod. 587, fol. 159v（おそらく1070年代）に類似の構図が認められる。⁽⁴⁵⁾ただしディオニシウ・レクショナリーは7月1日、ローマのアナルギリの挿絵である。

③画面右側、山を背景に数名の人物が並び、左側より歩み寄る二聖人に両手を差し上げる。跪く人物の膝元に白い带状のものが2つ並ぶ。⁽⁴⁶⁾

④画面右側に岩山を背景に腹の大きく膨れた裸体の人物が立ち、右手に棒を携える。左側に二聖人が立つ。左の聖人は箱を手にし、右の聖人は右手で祝福の印を結ぶ。奇跡伝最初のエピソード、水腫病の人物を癒す場面と推測される（図8）。⁽⁴⁷⁾

⑤画面右半分が剥落する。向かって左側に聖人が一人、彼のすぐ右側に腰をかめ中央に歩み寄る聖人がいるが、白

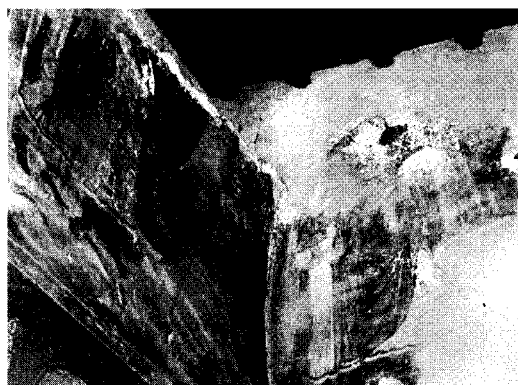


図8 南側廊東側、左：場面④、右：場面⑤

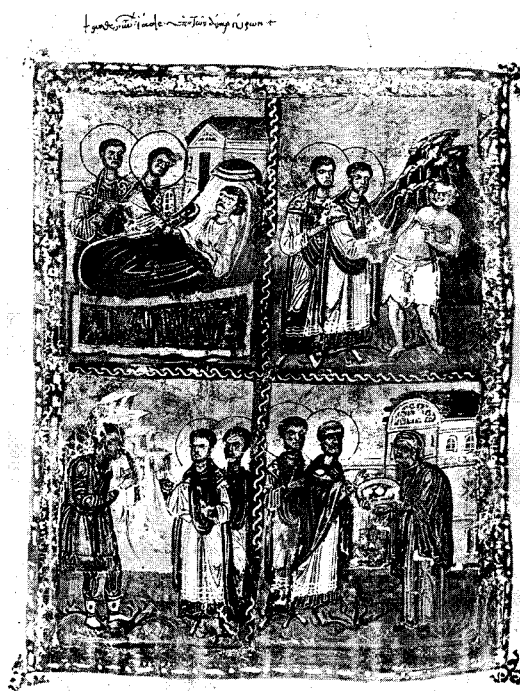


図9 パンテレイモン修道院 cod. 2, fol. 197r

髪であることから老人と見える（図8）。

さて、⑤で突如登場する老いた聖人は何者だろうか。他作例を参照しよう。前掲アトス山パンテレイモン修道院cod. 2、fol. 197rは、4分割された画面にそれぞれアナルギリ伝場面を配する頁で、⁽⁴⁸⁾右下の区画に白髪白髯の人物と若者が並ぶ場面が描かれる（図9）。右側の女性が白い円形のを3個載せた盆を聖人に差し出していることから、本場面はパラディア Παλλαδίαという女性が治療の返礼にダミアノスに卵3個を渡すエピソードに依拠するものと考えられる。⁽⁴⁹⁾壁画・写本ともに白髪の人物が登場し、かつ壁画の現存部分の構図が写本と類似するため、カストリアの失われた壁面にパラディアが描かれていた可能性は高いと見てよいだろう。

該当場面の聖人伝テキストにパラディアとアギイ・アナルギリ以外の人物は登場しない。女性から卵を受取ろうと手を伸ばす仕種から、老人はダミアノスとするのが妥当だろう。ペレカニディスとカダスも写本の老人をダミアノスと記述するが、他の区画に描かれた3場面やfol. 197vにおいて同一の相貌を持つ聖人の兄弟が、本場面でのみ年齢差を以て表された理由は説明していない。⁽⁵⁰⁾ダミアノスはなぜ老人として描かれたのだろうか。

聖人伝によれば、パラディアから報酬を受けたダミアノスをコスマスは許さなかった。⁽⁵¹⁾無償で治療を施すという彼らの誓いに反するためである。彼はダミアノスが先に神のもとに召され、自分とは一緒に埋葬されないように願う。しかし神は彼に告げる。パラディアは彼女自身の誓いのもとに卵を捧げたので、その誓いを破らせないよう卵を受取った行為は責められるものではない。⁽⁵²⁾ダミアノスは神に対し彼の誓いを侵していない。その後暫くしてダミアノスはコスマスより先に天上の聖人に列席し、⁽⁵³⁾コスマスは独り、病に苦しむ多くの人々と動物を癒す。コスマスの死後、兄弟は再び共に治癒の奇跡を起こし続ける。

報酬の授受の後いくばくかの時を経て、ダミアノスはコスマスよりも先に死した。パラディア場面の白髪の聖人がダミアノスであるならば、この異例の表現は、彼を一気に加齢し老人として表すことで、一足先に寿命が訪れることを示唆したのではないか。パンテレイモン修道院写本に見たように、老人ダミアノスがカストリアの画家A独自の創意でなかったことは注目すべき点で

あろう。⁽⁵⁴⁾画家はおそらく既存の手本に従ったのである。比較対象として有用な作例として、バシリオス2世のメノロギオンを挙げておく。⁽⁵⁵⁾10月17日の挿絵はアラビアのアナルギリの殉教場で、3人の兄弟とともにアナルギリが描かれるが、その内の一人が白髪で表されている。

次に同サイクルを擁するアイコンを検討しよう。聖堂に奉献されたアイコン（12/13世紀）には、南礼拝堂入口の図像と同様、中央にキリストより戴冠されるアナルギリの立像が描かれ、上部・左右を12の説話場面が囲む（図10）。⁽⁵⁶⁾このアイコンは聖堂の伝記場面のうち①から④の4場面を含むことが確認できるが、配列順は不同である。アイコンでは画面左上隅に①、その下に②と④が続き、③は上の帯、すなわち①の右側に並ぶ。パンテレイモン修道院写本の右下の場面と類似する構図がアイコン④下に見られるが、一方の聖人が白髪か否かは剥落のため確認は困難である。

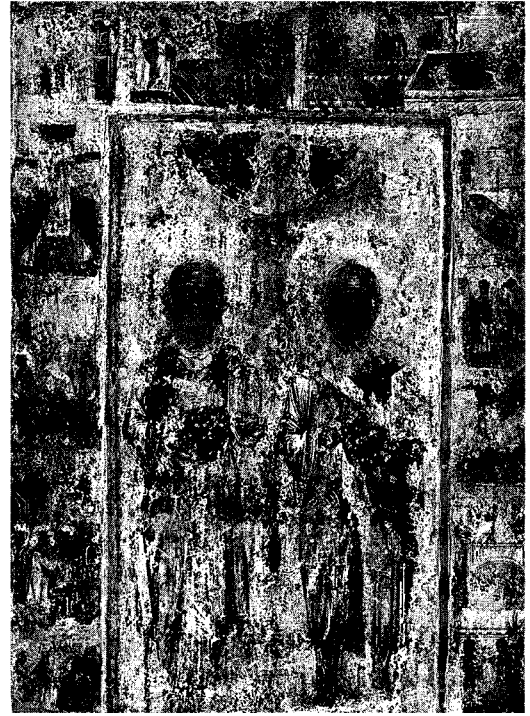


図10 カストリア・アイコン（12/13世紀）

壁画・写本・アイコンの図像選択が共通することから、サイクルのモデルの存在が想定される。本サイクルの残存作例は稀少であるため歴史的な経緯を辿ることができず、カストリアの聖堂の位置づけが判然としない。以下に他の聖人伝サイクルを参照し、この種の図像の源泉と伝播、中期ビザンティン聖堂において担った役割について見ていきたい。

聖人伝サイクル一般は4世紀に殉教者記念堂の壁面を飾ったことが文書史料から知られる。⁽⁵⁷⁾初期の作例は現存せず、ローマ、サンタ・マリア・アンティークァ聖堂のキリコスとユリッタ伝図像（8世紀）が最古の現存作例である。⁽⁵⁸⁾聖遺骸を擁したテサロニキのアギオス・ディミトリオス聖堂にも、伝記場面（10世紀）が描かれた。⁽⁵⁹⁾11世紀以降作例は飛躍的に増加し、特にゲオルギオスとニコラオス伝が好まれるようになる。⁽⁶⁰⁾聖者暦を載せる写本が数多く制作され、挿絵入りのものには聖人像や殉教場面が描かれた。⁽⁶¹⁾聖人伝サイクルを擁するアイコンや、聖人像と伝記場面を組合わせた伝記アイコンの制作も盛んになる。

文書史料や幾つかの聖堂が示すように、聖人伝図像の源泉は殉教者記念堂に求められよう。⁽⁶²⁾イコノクラスム以前の作例はほぼ現存しないため、どのような図像が堂内のどの壁面を飾ったのか、またこの種の図像がどの程度伝播していたかを窺い知ることはできない。伝記場面の作例が増加

する中期以降は、聖人伝サイクルはナルテクスや附属礼拝室等に配されることが多い。図像の普及にはどのような媒体を介したのか。マルク＝ヴァイナーMark - Weinerは写本よりもむしろ、アイコンが図像伝播に大きく寄与したと示唆する。⁽⁶³⁾ いずれも持運びが容易だが、前者に比して後者がより図像の種類に富むからである。シェヴチェンコNancy Ševčenkoはニコラオス伝図像のカatalog化と分析を行い、必ずしもテキストが図像に反映されていないことを指摘した。⁽⁶⁴⁾ 多くの聖人伝図像の型は聖書場面に求められ、さらに西欧の手本や実際の典礼をもとに図像が生み出されたという。⁽⁶⁵⁾

ビザンティン美術全般に当てはまるが、聖人伝図像の特色も型の踏襲と堅固な保守性にある。例えばニコラオス伝の標準的なサイクルでは、11-15世紀の長期間新たな場面が追加されることがなかった。⁽⁶⁶⁾ ゲオルギオス伝サイクルも同様、広範囲に亘って点在する聖堂壁画や写本挿絵に一貫した図像選択が認められ、その手本を11世紀の首都の聖堂に求める説がある。⁽⁶⁷⁾

アギイ・アナルギリ伝サイクルも他の聖人伝サイクルと同様の歴史的背景と性格を持つものだろう。図像選択と構図は各作例でほぼ共通し、アイコンに描かれた場面は数の上で最も多い。基本的に聖人伝から場面が選択されるが、テキストの完全な再現ではなく、テキストにないエピソードも登場する。サイクルを擁する作例の制作年代は12世紀以降に位置づけられ、諸聖人伝サイクルが流行する時期に重なる。

初期の殉教者記念堂に描かれた伝記図像と中期以降のそれとは、やや性格を異にするだろう。前者が象徴的な墓廟において殉教者の生涯を記録し、顕彰し、救済の証とするのに対して、後者は聖堂寄進者の墓や葬礼用礼拝堂に多く登場するからである。⁽⁶⁸⁾ アギイ・アナルギリ聖堂の場合も、伝記サイクルは寄進者が埋葬されたと見られる南側廊に配され、北側廊ではゲオルギオス伝が寄進者一族の肖像とともに描かれた。寄進者は自身と家族の救済を願い、救済の証たる聖人たちの伝記場面を並べ連ねたのである。

おわりに

本稿ではカストリア、アギイ・アナルギリ聖堂に描かれた献堂聖人の肖像と聖人伝場面に着目した。ビザンティン美術は型の踏襲を大原則とするが、聖人の相貌の表現は、時代によって、また同時期の作例においても異なる様相を呈することが観察された。それは原則からの逸脱でも、原則と実情の齟齬でもなく、むしろビザンティンの人々の視覚に迫る手掛りとなり得るものだろう。表現の振幅は聖人に対する崇敬の範囲の広さと手本となる型の豊穡さに由来する。異なる型に従うために生まれる表現の相違は、その像がアナルギリであることを否定するものではなかった。そこにビザンティンにおけるアイデンティティの性質が垣間見えよう。

アギイ・アナルギリ像は聖堂東側の壁面に数度描かれ、聖人伝サイクルが南側廊に配された。装飾プログラムにおける献堂聖人の位置づけについては別稿を用意したい。献堂聖人を顕彰する

ためには複数のパターンがあるが、ここでは概括的に列挙するに留める。①献堂聖人が複数回描かれる。②アプシスまたはドームに配置される、③キリストや聖母、または寄進者を伴いナオスやナルテクスに描かれる、④聖人伝サイクルが描かれる。本稿の対象であった聖堂は①・③・④の条件を満たすものである。

また本稿ではアナルギリ伝サイクルの記述と、他作例との簡単な比較を行った。サイクル自体は他の聖人伝と同じ歴史的背景と特徴を持つが、ダミアノスを一場面でのみ老人として描くという表現上の特質を指摘した。同一人物を異なる年齢で表すことはいかなる意図を包含するものか。あるいはその意図すら考慮されることなくただモデルに忠実であったのか。アギイ・アナルギリ像についての考察を通して得られた見解と問題を基に、今後もビザンティン美術の特質を追って行きたい。

注

- (1) カストリアに残るモニュメントと歴史一般については以下参照。S. Pelekanides, "Kastoria," *Reallexikon zur byzantinischen Kunst (=RbK)*, III, 1978, cols. 1190-1224; E. Drakopoulou, *Η πόλη της Καστοριάς τη Βυζαντινή και μεταβυζαντινή εποχή (12ος-16ος αιώνας). Ιστορία - τέχνη - επιγραφές*, Athens, 1997.
- (2) アギイ・アナルギリ聖堂の基本文献は以下参照。A. K. Orlandos, "Βυζαντινά μνημεία της Καστοριάς," *Αρχαίον των Βυζαντινών μνημείων της Ελλάδος* 4 (1938), pp. 10-60; S. Pelekanidis, *Καστοριά, I, Βυζαντινά τοιχογραφία, πίνακες*, Thessaloniki, 1953, pls. 1-42; T. Malmquist, *Byzantine 12th Century Frescoes in Kastoria: Agioi Anargyroi and Agios Nikolaos tou Kasnitzi*, Uppsala, 1979; S. Pelekanides - M. Chatzidakis, *Kastoria*, Athens, 1984, pp. 22-49; N. K. Moutsopoulos, *Εκκλησίες της Καστοριάς: 9ος-11ος αιώνας*, Thessaloniki, 1992, pp. 307-392. 堂内のプログラムの一部を論じたものとして、益田朋幸、「アギイ・アナルギリ聖堂（カストリア）東壁面のプログラム」、『美術史研究』、第41号、2003年、65-80頁。
- (3) 10世紀：Pelekanides - Chatzidakis, *op. cit.*, p. 23. 11世紀：Orlandos, *art. cit.*, p. 60.
- (4) 初期の壁画はナルテクス北壁と北側廊北西部に残る。この部分の制作年代に関する議論は、Moutsopoulos, *op. cit.*, pp. 382-391. 後代の壁画の年代については、Malmquist, *op. cit.*, pp. 103-105; Pelekanides - Chatzidakis, *op. cit.*, p. 44. 両者とも1170-1180年代とする。
- (5) 銘文はナルテクス東壁に描かれた「昇天」の天使の足元・北側廊の扉上・寄進者像・ナオスの南壁面等堂内数箇所に記される。Orlandos, *art. cit.*, pp. 35, 55-57; Pelekanides - Chatzidakis, *op. cit.*, pp. 39-43; Drakopoulou, *op. cit.*, pp. 44-53. 本聖堂寄進者について以下も参照。M. Panayotidi, "Η προσωπικότητα δύο αρχόντων της Καστοριάς και ο χαρακτήρας της πόλης στο δεύτερο μισό του 12^{ου} αιώνα," *Δώρον: τιμητικός τόμος στον καθηγητή Νίκο Νικονάνο*, Thessaloniki, 2006, pp. 157-166.
- (6) 建立当初の献堂対象は不明である。
- (7) Pelekanides - Chatzidakis, *op. cit.*, pp. 26-28, 43-44.
- (8) 画家は絵の具が垂れて出来上りの絵を損なわないよう、通常聖堂上部から壁画制作を開始する。Malmquist, *op. cit.*, p. 94.
- (9) L. Hadermann - Misguich, *Kurbinovo: les fresques de Saint-Georges et la peinture byzantine du XII^e siècle*, Brussels, 1975, pp. 563-566. マルムキストも第三の画家の存在の可能性を指摘する。Malmquist, *op. cit.*, p. 98.
- (10) 両聖堂の壁画は以下に比較分析が行われている。Hadermann - Misguich, *op. cit.*, pp. 563-584; Malmquist, *op. cit.*, pp. 98-103.

- (11) 中期ビザンティン聖堂の図像プログラム一般について、O. Demus, *Byzantine Mosaic Decoration*, London, 1947.
- (12) ビザンティンでは元の名の一部を改変し出家後の名前とする場合が多い。Malmquist *op. cit.* p. 160.
- (13) ナルテクスからナオスへ続く入口上部の銘文に「病を患う肉体の癒し」、「魂の救済と天上における席」を乞うたことが記されている。Drakopoulou, *op. cit.*, pp. 44–46.
- (14) C. Mango, "On the Cult of Saints Cosmas and Damian at Constantinople," *Θυμίαση στη μνήμη της Λασκαρίνας Μπούρα*, vol. 1, Athens, 1994, pp. 189–192.; M. Perraymond, "Linee di diffusione del culto dei Santi Anargiri attraverso le testimonianze monumentali ed epigrafiche del VI secolo," *Radovi XIII. Medunarodnog kongresa za stakrscansku arheologiju (Split - Poreč 25 / 9–1 / 10 / 1994)*, II, Split, 1998, pp. 673–686.
 聖人伝は以下を参照。L. Deubner, *Kosmas und Damian*, Leipzig, 1907; A. J. Festigièr (trans.), *Sainte Thècle, Saints Côme et Damien, Saints Cyr et Jean (extraits), Saint Georges*, Paris, 1971, pp. 85–213.
 アギイ・アナルギリの伝記や奇跡を語る写本は数多く、Deubnerによって系統分類と分析が行われた。テキストは、①アジアのアナルギリの生涯と奇跡、②ローマ・アラビアのアナルギリの殉教伝、③奇跡伝に分けられ、①と②では聖人の生立ちや生前の行い、最期が語られる。③では聖人たちが生前死後に起こした治癒の奇跡のエピソードが収集される。
- (15) アラビアの二聖人は10月17日、ローマは7月1日、アジアは11月1日である。H. Delehay, *Synaxarium Ecclesiae Constantinopolitanae*, Brussels, 1902, cols. 143–147, 185, 795.
- (16) 後期以降アラビアのアナルギリは頭にターバンを巻く。この表現がいつ頃から始まったかは不明である。
- (17) ナクソス島アギオス・ゲオルギオス・ディアソリティス聖堂南壁（11世紀）、エヴリタニアのエピスコピ聖堂北西区画北壁（13世紀）、イェラキのアギオス・ヨアンニス・クリソストモス聖堂（13世紀末–14世紀初頭）など。
- (18) A. Chatz Nikolaou, "Heilige," *RbK*, II, cols. 1077–1082; W. Artelt, "Kosmas und Damian," *Lexikon der christlichen Ikonographie*, 1968–76, vol. 7, pp. 344–352. ディオニシオスによる絵画指南書（1730年代）では、ローマのアナルギリが「若者、尖った髭」、アジアが「若者、生え始めの髭」とする。上田恒夫他訳、『ディオニシオスのエルミニア』、金沢美術工芸大学美術工芸研究所、1999年、297頁。
- (19) A. Xyngopoulos, "To ανάγλυφον των Αγίων Αναργύρων εις τον Άγιον Μάρκον της Βενετίας," *Αρχαιολογικόν Δελτίον* 20 (1965), Μελεταί, pp. 84–95.
- (20) Xyngopoulos, *art. cit.*, p. 90.
- (21) ザキントス島救世主聖堂のディアコニコン（12世紀終わり–13世紀始め）、カストリアのアギオス・ステファノス聖堂（13世紀）、クレタ島メスクラのキリスト聖堂（1303年）など。
- (22) オシオス・ルカス修道院主聖堂ナルテクス交差ヴォールト（11世紀）、アギオス・ニコラオス・トゥ・カスニツィ聖堂ナオス西壁（12世紀）など。パナギア・トン・ハルケオン聖堂（1028年）は、7名のアナルギリが聖堂東側のペーマ内に描かれる珍しい例である。
- (23) J. M. Spieser, *Thessalonique et ses monuments du IV^e au VI^e siècle contribution à l'étude d'une ville Paléochrétienne*, Paris, 1984, p. 136, pl. XXIII–1, XXVI–1.
- (24) M. Prelog, *Die Euphrasius Basilika von Poreč*, Zagreb, 1986, pp. 22, pls. 15, 17, 18.
- (25) J. Clédat, *Le monastère et la nécropole de Baouit*, Cairo, 1906, pp. 153–164, pls. XCVII, pl. C.
- (26) O. M. Dalton, "A Coptic Wall - Painting from Wadi Sarga," *The Journal of Egyptian Archaeology* 3 (1916), pp. 35–37, pl. IX.
- (27) アラビアのアナルギリは三人の兄弟とともに殉教した。Delehay, *op. cit.*, cols. 144–146.
- (28) H. Brandenburg, *Ancient Churches of Rome: From the Fourth to the Seventh Century*, 2004, Milan (in English, Turnhout, 2005), pp. 222–224, pls. 134, 138, 139.
- (29) ただしダミアノスは後世の補修の跡が見られ、その際に容貌の改変が行われた可能性も否定できない。

Brandenburg, *op. cit.*, p. 224.

- (30) H. Maguire, *The Icons of their Bodies : Saints and their Images in Byzantium*, Princeton, 1996.
- (31) G. and M. Sotiriou, *Εικόνες της Μονής Σινά*, vol. 1, Athens, 1956, pl. 85 ; vol. 2, 1958, pp. 97–98.
- (32) *Ibid.*, vol. 1, pl. 84 ; vol. 2, p. 96–97.
- (33) N. P. Ševčenko, *Illustrated Manuscripts of the Metaphrastian Menologion (=Menologion)*, Chicago, 1990.
- (34) *Ibid.*, p. 39, fig. 1C11, 1C12.
- (35) *Ibid.*, p. 64, fig. 1G1.
- (36) *Ibid.*, p. 152, fig. 6F2.
- (37) この他、無髯のアナルギリの作例は注21を参照。
- (38) 同じ画家の手とされるスヴェティ・ジョルジェ聖堂のアギイ・アナルギリもカストリアの聖堂と同じ図像タイプで描かれるが、ハデルマン＝ミスギッシュは有髯の彼らをアラビアの兄弟であるとする。
Hadermann - Misguich, *op. cit.*, pp. 240–243.
- (39) 古代ローマにおけるカストルとポリュクス（ディオスクーロイ）の表現にも、アギイ・アナルギリと同様の問題が見られる。ディオスクーロイの属性は、アギイ・アナルギリの他、双子やペアの聖人たちに継承された。B. Poulsen, "The Dioscuri and the Saints," *Analecta Romana Instituti Danici* 21 (1993), pp. 141–152. 双子の表現について、そして古代の神々が聖人へと変貌していく過程については、今後も考察を進めていきたい。
- (40) アナルギリ伝サイクルを取り上げたものとして、S. Tomeković, "Les répercussions du choix du saint patron sur le programme iconographique des églises du 12^e siècle en Macédoine et dans le Péloponnèse," *Zograf* 12 (1981), pp. 25–42.
- (41) G. Marinou, *Άγιος Δημήτριος η Μητρόπολη του Μυστρά*, Athens, 2002, pp. 94–95, pl. 13 α.
- (42) 現在では剥落・欠損する南礼拝堂の南壁面にも、アギイ・アナルギリ伝が描かれていただろう。
- (43) アジアのアギイ・アナルギリ伝「(テオドティが) ιερά γράμματα (聖書) を教えた」に対応するか。Deubner, *op. cit.*, p. 87. Tomekovićは、聖母あるいはテオドティが聖書を兄弟に授ける場面とする。Tomeković, *art. cit.*, p. 33.
- (44) 聖人伝「聖霊によって医療を学ばされる」に対応するか。Deubner, *op. cit.*, p. 88.
- (45) S. Pelekanides et al., *The Treasures of Mount Athos : Illuminated Manuscripts*, vol. 2, Athens, 1975, pp. 156, 349, fig. 279 ; K. Weitzmann, "Das Evangelion im Skevophylakion zu Lawra," *Seminarium Kondakovianum* 8 (1936), pp. 83–98 ; T. Masuda, *Η εικονογράφηση του χειρογράφου αριθ. 587μ. της Μονής Διονυσίου στο Άγιο Όρος. Συμβολή στη μελέτη των Βυζαντινών Εναγγελισταρίων*, Ph. D. Diss., Thessaloniki University, 1990, pp. 134–135, fig. 63.
- (46) 聖人伝には該当する章句を見出せなかった。
- (47) Festigièrre, *op. cit.*, pp. 98–100.
- (48) Pelekanides et al., *op. cit.*, p. 155, fig. 278 ; S. N. Kadas, *Το εικονογραφημένο χειρόγραφο αρ. 2 της Μονής Αγίου Παντελεήμονος (Άγιον Όρος) : συμβολή στη μελέτη των Βυζαντινών εναγγελίων*, Thessaloniki, 2001, pp. 79–84, pls. 8–9.
- (49) Deubner, *op. cit.*, pp. 88–90 ; Pelekanides et al., *op. cit.*, p. 349.
- (50) Pelekanidis, *loc. cit.* ; Kadas, *op. cit.*, pp. 83–84.
- (51) パラディアのエピソードは、Deubner, *op. cit.*, pp. 88–90.
- (52) また三個の卵は三位一体を象徴している。Tomeković, *art. cit.*, p. 33.
- (53) ダミアノスの死は誓いを破った罰でもなく、殉教によるものでもない。コスマスも同様、平和裏に寿命を全うした。
- (54) ミストラの府主教座聖堂に描かれたパラディア場面では、コスマス・ダミアノスとも同年代の若者として表されている。G. Millet, *Monuments byzantins de Mistra. Matériaux pour l'étude de l'architecture et de la peinture*

en Grèce aux XVe siècles, Paris, 1910, pl. 73. 3.

(55) *Il Menologio di Basilio*, Turin, pl. 120.

(56) E. Tsigaridas, *Kastoria Byzantine Museum : Byzantine and Post - Byzantine Icons*, Athens, 2002, pp. 8–9. fig. 3.

(57) H. Deliyanni - Doris, "Menologion," *RbK*, VI, cols. 129–136.

(58) P. Romanelli - P. J. Nordhagen, *S. Maria Antiqua*, Rome, 1964, figs. 36–37.

(59) A. Xyngopoulos, *Ο εικονογραφικός κύκλος της ζωής του Αγίου Δημητρίου*, Thessaloniki, 1970.

(60) ゲオルギオス伝とニコラオス伝図像については以下参照。T. Mark - Weiner, *Narrative Cycles of the Life of St. George in Byzantine Art*, Ph.D. Dissertation, New York University, 1977 ; N. P. Ševčenko, *The Life of Saint Nicholas in Byzantine Art (=St. Nicholas)*, Turin, 1983 ; Tomeković, *Supra*.

(61) Ševčenko, *Menologion*.

(62) Xyngopoulos, *op. cit.*, p. 55 ; Mark - Weiner, *op. cit.*, p. 302 ; Ševčenko, *St. Nicholas.*, p. 158.

(63) Mark - Weiner, *op. cit.*, pp. 308–309.

(64) ニコラオス伝サイクルも基となるテキストが存在しない場合がある。N. P. Ševčenko, "The Evergetis Synaxarion and the Celebration of a Saint in Twelfth - Century Art and Liturgy," M. Mullet - A. Kirby (eds.), *Work and Worship at the Theotokos Evergetis 1050–1200*, Belfast, 1997, p. 393.

(65) Ševčenko, *St. Nicholas.*, pp. 155–156.

(66) *Ibid.*, p. 156.

(67) Mark - Weiner, *op. cit.*, pp. 266, 274.

(68) ニコラオス伝サイクルは葬礼用礼拝堂に多く見られる。Ševčenko, *St. Nicholas.*, p. 161.

〔図版出典〕

図 1、8 筆者による撮影。

図 2 S. Pelekanides - M. Chatzidakis, *Kastoria*, Athens, 1984, fig. 3.

図 3 A. Xyngopoulos, "Το ανάγλυφον των Αγίων Αναργύρων εις τον Άγιον Μάρκον της Βενετίας," *Αρχαιολογικόν Δελτίον* 20 (1965), Μελετάι, pl. 47.

図 4 M. Prelog, *Die Euphrasius Basilika von Poreč*, Zagreb, 1986, fig. 15.

図 5 H. Brandenburg, *Ancient Churches of Rome : From the Fourth to the Seventh Century*, 2004, Milan, figs. 138, 139.

図 6、7 G. and M. Sotiriou, *Εικόνες της Μονής Σινά*, vol. 1, Athens, 1956, pls. 84, 85.

図 9 S. Pelekanides et al, *The Treasures of Mount Athos : Illuminated Manuscripts*, vol. 2, Athens, 1975, fig. 279.

図 10 E. Tsigaridas, *Kastoria Byzantine Museum : Byzantine and Post - Byzantine Icons*, Athens, 2002, fig. 3.